

武道の海外普及に関する一考察 ——福岡庄太郎によるアルゼンチンへの柔術の普及——

藪 耕太郎*

19世紀末から20世紀初頭における世紀転換期は、武道の海外普及の端緒ともいべき時期にあたる。当該時期は、講道館の柔道家たちが海外でも華々しい活躍を残しており、武道の海外普及における通説的な歴史像も彼らエリートたちによる普及の様態によってつくられている。しかしそのいっぽうで、同時期に海外へ渡った他の格闘技者たちについては軽視され、また受容者側の様態に関しては十分に検討されない傾向がある。そこで本研究では、福岡庄太郎という市井の柔術家によるアルゼンチンのロサリオ市における柔術普及の活動について当時の現地史料を用いて詳密に論考し、特に受容者側の視点を重視しつつ、普及という行為について捉え直した。結果、①武道の海外普及において、福岡のような非エリートによる普及回路も存在していたこと、②福岡による普及活動は受容者側の社会との接点をもつことでより促進されたこと、③受容者側によって福岡のもつ柔術に柔道とは異なる意味が付与され、それが幅広い領域で活用されたことなどの知見を得た。

キーワード：武道 柔術 アルゼンチン 世紀転換期 伝播と普及

はじめに—問題の設定

本研究は、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期において、柔術家の福岡庄太郎によるアルゼンチンのロサリオ市における普及の様態を明らかにすることで、武道の海外普及の端緒に関する通説を再検討するものである。

これまでの研究において、武道の普及を語るさいにその中心とされてきたのは講道館柔道であり、柔道の普及をもって武道の普及が語られる向きがあった。講道館柔道は、段級制の導入や、技術の理論化、ルールの整備、高等教育機

関への普及、嘉納治五郎（1860-1938）や講道館の機関紙による言説の力により、武術を武道へと再構成することに成功した先駆的存在であり、またそれらの成功が武道の普及に繋がった、とされるからである¹⁾。

しかしながら、先行研究における到達点を認識するいっぽうで、当該時期の海外における武道の普及に際しては、以下に示すような問題点を抱えているように思われる。

第1に、日本国内における武道普及の筋道が海外普及のさいにも援用されていることである。つまり、嘉納ないし講道館によって適任と判断されたエリート柔道家による現地の高等教育機関または社会的地位の高い階層内での柔道の指導が、海外における普及のほとんど唯一の

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

方法と見なされる傾向にある。たとえば、この件に関する好例として、山下義韶が挙げられよう。講道館創設から2年後に入門した山下は、警視庁武術大会での活躍により、1889年に警視庁武術世話係となり、また東大や慶応義塾といった高等教育機関でも柔道を指南している。1903年に渡米した山下は、シアトルやニューヨーク等でデモンストレーションを行い、ワシントンではハーバード大学で講習を行っている。その後、セオドア・ローズヴェルト大統領ら名士の前で柔道を披露し、大統領自らが門人となって山下に教えを請うた。山下は年給4000ドルという破格の契約で、アナポリスの海軍兵学校で2年間柔道を指導した後、1907年に帰国している。このような山下の活躍は、講道館の機関紙に掲載されたのみならず、後の研究にも大きな影響を与えている。

第2に、普及する側、つまり指導者側の視点が重視されており、受容する側、すなわち海外における社会の諸関係への視点が欠如しがちである。受容に対する視点の欠如は、武道の普及があたかも普及者側の思惑通りに進展したように認識される危険性を孕んでいる。

第3に、武道の海外普及において重要な意味を持つ初期段階の時代状況が不鮮明である。先述したように、普及する側の視点を重視すると、必然的に日本国内の資料を多用する結果となるが、情報量の少ない時代においては、歴史に名を残すような著名な武道家や華々しい功績が脚光を浴びがちであり、結果的に武道の海外普及という名目で当時海外に進出した武道家がやや単一的に扱われている。

第4に、上記の3点を踏まえたうえで、世紀転換期に新天地を目指した柔道以外の格闘技者の果たした役割が軽視されがちである。特に、

日本国内においても武道と武術の区別が十分に なされていなかった時代において、武術家を武道的でないという理由で武道の海外普及の対象から除外できるのか、という疑問に対する明確な回答はいまだなされていない。

こうした不足点が指摘される背景には、上記の第4点と関連して、講道館発行による機関紙が先行研究の多くで重要な史料として活用されていることが挙げられる。講道館は、嘉納が主宰もしくは監修した機関紙を数多く発刊しており、嘉納による講演会で行った演説などもほとんどが文章化されている。また早くから言説活動を行った嘉納自身に対しては先行研究において高い評価がなされている。例えば、以下のよう な記述を典型例として挙げることができよう。

「嘉納は柔道家であると同時に、柔道について倦まず弛まず語り続けた「言説の人」でもあり、その精力的な言論活動を通して、もはや武士階級の存在しない近代社会における柔道（ひいては武道）^{レゾン・デートル}の存在意義を確立することに成功した。その意味で講道館柔道の発展と普及は、全体として見れば、実戦の勝利というよりもむしろ「言説の勝利」であったといえよう。」〔井上（2004）、p.48〕

このような評価は、講道館柔道そのものに対して、あるいは井上自身が指摘する「全体として」武道を俯瞰した場合には妥当であろう。しかしながら、海外からの情報量が圧倒的に少なかった時代において、嘉納の主義主張が凝縮された言説を中心に据えて武道の海外普及を論じるには限界があると考えられる。換言すれば、当該時期に海を渡った者たちに対する眼差しが

十分に注がれないまま、著名な柔道家の普及行為がそのまま武道の普及として認識されがちである、ということである。

こうした動向に対し本研究では、これまで「山師まがい」として否定的に論じられがちであった市井の柔術家の中から、福岡庄太郎を扱うことにより、嘉納の理念やイデオロギーを論拠とする通説的な歴史像を相対化してみたい。福岡を扱う理由は以下の5点にある。

第1に、福岡の渡米時期（1902年）と、講道館柔道の海外への普及活動における初期段階が、ほぼ同時期である。

第2に、後援者によって送り出されたエリート柔道家ではなく、後ろ盾を持たない市井の柔術家である。

第3に、柔道の普及が使命である柔道家と異なり、柔術のみならず柔術を含む複数の武術を教えることができた福岡は、結果的に幅広い階層との接点を持つことが可能であった。

第4に、講道館が禁止していた異種格闘技興行に参加したことが²⁾、現地社会との交流を結ぶ端緒になりえた。

第5に、上記の3および4と関連して、特定の使命を持たない福岡は、現地のスポーツクラブに簡単に加入することができ、技術交流を図ることができた³⁾。

ただし、5点目の理由に関しては一定の留保が必要である。なぜなら、講道館の柔道家でも、現地のスポーツクラブと交流を図った例は存在するからである。例えば、1904年に渡米した前田光世は、欧米を中心に異種格闘技興行を重ねているが、途中で立ち寄ったメキシコで、しばらくの間現地のスポーツクラブと交流を持っている。しかしながら、前田はメキシコに数ヶ月しか滞在しておらず、福岡によるスポーツ

クラブにおける普及と比べると、交流に費やした期間が非常に短い。本稿では、普及活動において生じた普及者と受容者の間に生じる双方向の関係を重視するものであり、この点において、福岡による普及の様態とは異なると考えられよう。

次に、先行研究を検討したい。まず福岡庄太郎個人に焦点を当てた研究としては、大塚真琴による「パナマ日本人移住史」（1985）および「福岡庄太郎の生涯」（1983）がある。この研究において大塚は、日本人移住史との繋がりで福岡を解釈し、主としてパラグアイ入国後における福岡の業績を讀えながらその生涯を記しており、パラグアイ社会と福岡との関係を考察するうえで重要な資料である。しかし、武道の普及という視点から福岡を捉える試みはなされておらず、後にパラグアイで成した福岡の功績も、福岡の個人的な人徳という観点から論じられている。また、アルゼンチンにおける福岡の動向に関してはほとんど触れられていない。

本研究では、パラグアイにおける福岡の成功の基盤もしくは萌芽が、アルゼンチンにおいて既に発露していたと認識しており、また、福岡の成功要因を、福岡自身の人徳のみに求められるものではない、と考えている。さらに、柔術家である福岡の動向を、従来型の武道の海外普及の回路に当てはめることに限界があると思われる点については、前項で述べた通りである。

いっぽう、世紀転換期における海外での柔術の受容に関する研究では、岡田桂による「十九世紀末—二十世紀初頭のイギリスにおける柔術ブーム—社会ダーウィニズム、身体文化としての隆盛と帝國的な身体」（2004）がある。岡田は、当時のイギリス国内における身体文化との関わ

り合いの中で柔術の受容を検討しており、本研究とは直接の対象や方法は異なるものの、普及者が抱く理念ではなく、受容者側の視点からみた柔術の受容の背景と様態を重視する点において、本研究と共通の問題意識を抱えているといえるだろう。

なお、本研究では武道、武術、柔道、柔術という語句が頻繁に用いられる。そこで、語弊を生じさせないためにも、各語句の文中における意味を限定しておく。

武道は、明治中期以降に形成された近代文化として解釈する。武道の近代性に関しては本文で明らかにする。本研究においては、柔道や剣道は武道の範疇である。また、武道の理念は時代ごとに変容するが、イデオロギー装置としての武道、国家主義的な武道、また終戦後のスポーツ化する武道については、本稿で対象とする時期とは異なるため、言及しない。武道の武術との差異化を図る際において、近代化に伴う実戦性の喪失と武道理念の形成、修養主義化を特徴として挙げるができる。

武術は、明治期以前に体系化された闘争技術を指すものとする。この点で、柔術や剣術は武術の範疇に含まれる。武道と同様の理由により、武術の成立過程その他に関しては言及しない。

柔道は講道館柔道を指し、特に柔術は流派名を付記しない限り、講道館によらない柔術諸流派一般をさすものとする。

最後に、本研究を行うに際してアルゼンチン国内における福岡の動向に関しては、現地の新聞や、当時の福岡の身分証明書、福岡の所属していたスポーツクラブの回顧録などを最大限に活用することで、受容者側の視点をできる限り取り込むことを心がけたい。

1. 世紀転換期における日本とアルゼンチン

(1)日本国内における講道館柔道の普及と柔術の様態

1882年に嘉納によって創設された講道館であるが、創設当初は嘉納の私塾の域を出るものではなかった。それが1890年代前半に累計で2000人から3000人もの入門者を抱えるに至った要因として、ここでは2点列挙したい。

第1点は、警視庁主催による武術大会などを通じて他の柔術諸派を打ち破ることで、強い柔道のイメージを確立できたこと。そして2点目は、当時の日本を風靡していた欧化主義や西洋合理主義と、その中から逆説的に生じた懐古主義的側面の強いナショナリズムとを武道（=柔道）の名のもとに止揚することに成功したこと、である。

そもそも嘉納が、講道館柔術とせずに講道館柔道と呼称したのは、旧態依然とした柔術との差別化を図るためであった。また、嘉納は柔術の全てを否定するものではなかったが、柔術を一段下の位として捉えていたことは間違いのない⁴⁾。それは、嘉納自身による以下のようなことばでも明らかである。

「当時こういう武術をやる人は、相当に残ってはいたが、世間のだいたいからいうと、武術などはほとんど省みられない状態であったから、武術は極端にすたれていたとってよい。…ある柔術家は、相撲取りと取り組んで木戸銭をあつめたということがあった時代だ。…近來、世間一般に、講道館柔道ならずとも皆挙って柔道といいなしているが、我柔道はこれらとは撰を異にして、広くかつ深い意味を有してい

るのである。故に、我が教うる柔道は、在来の柔術と比べて一段と相違せるものを授けた」〔大滝編（1972）、pp.28-29〕

事実、当該時期において柔術の地位は低く、幕末の著名な柔術家たちも他の職業に鞍替えるか、当時人気を博していた興行試合に参加して日銭を稼ぐようなありさまであったことから、嘉納のこうした認識、また柔術との差別化を図る戦略は功を奏していたと考えられる。

しかしながら、当時柔道が勢力を伸ばしていたのは、まだ東京都内とその近郊に過ぎなかったことを看過するべきではないだろう。たとえば福岡の生まれた佐賀県において、講道館による正式の道場ができるのは1906年のことである⁵⁾、柔術流派として名の高い関口流柔術や竹内流柔術も、明治期以降に道場を開設している⁶⁾。佐賀県下において、柔術諸派が紆余曲折を経て講道館の傘下に入るのは1910年頃であることを鑑みても、講道館が斯界の中心となりつつあった首都圏とは異なる様相を呈していたと考えられる。さらに、講道館発展の大きな要因が、日本の伝統との連続性を組み込むことにあることは先に述べた。しかしこの場合における「伝統」が、井上の指摘するとおりの「創られた伝統」⁷⁾の一形態であるならば、一見すると日本古来の武術から柔道へと連続しているように見える「伝統」の継承という行為が、必ずしも連続しているわけではないことを指摘できるだろう。逆に言えば、武術が持つ「伝統」を適宜に取捨選択したことで、講道館は近代性を獲得することができたと考えられる。しかし近代化する過程において講道館は、素手の格闘におけるあらゆる側面を想定した実践的武術としての性格を喪失してしまった、ともいえるのである。

以下にその詳細を述べたい。

講道館を創設するにあたり嘉納は、自らが学んだ天神真楊流柔術と起倒流柔術を基盤に置いた技術体系を作りあげた。その際に嘉納は、「起倒流を学んで投技の妙味を悟って以来、柔道の技術方面の修行に投技の特に重んぶべきことを信ずるに至り⁸⁾、「乱取りにおいては立勝負に重きをおき、寝勝負は比較的軽く見るを適当とする⁹⁾」ようになった。なぜなら、投技を先に覚えれば寝技を覚えるのが簡単になり、また変幻自在な投技の攻防を学ぶことで、肉体面のみならず精神的にも鍛えることが可能になる、と嘉納は考えたためである¹⁰⁾。こうした発想は嘉納の合理的な思考を裏付けるものであり、またルールや技術の体系化によって近代スポーツとしての柔道が確立していく大きな要因となった。しかし、寝技や当身技¹¹⁾をおろそかにしたことで、柔術が持っていた実戦性を失うことにも繋がったといえるだろう。

(2)アルゼンチンから日本への眼差し

次に、同時代のアルゼンチンにおける日本像を垣間見ておきたい。

柔道が海外発展を遂げる要因として、日露戦争における日本の勝利を無視することはできない。しかしながら、これまでの研究で対象とされてきたアメリカやイギリスといった先進国ではなく¹²⁾、また地理的にも日本から遠く離れたアルゼンチンにまでも日露戦争の余波が訪れていたことはあまり知られていない。

そもそも、日露戦争において活躍した軍艦のうち、日進と春日はもともとアルゼンチンの軍艦であった。国境問題で揉め、チリとの武力衝突を想定して建造中であった軍艦が、1902年に両国間の合意により不要となったため、対露開

係が緊張していた日本が買い取ったのである。また、当時アルゼンチン海軍大佐であったマヌエル・ドメック・ガルシアは、日露戦争観戦武官に任命され、日露戦争をつぶさに観察した後、アルゼンチンで報告を行っており、日本が日露戦争で勝利した、というニュースはアルゼンチンまで届いていた。さらに、1906年にアルゼンチン海軍練習艦のサルミエント号が横浜に入港した際、同艦上で行われた柔道のエキシビションを見た艦長ディアスは「小国日本がロシアを破った根本は柔道と結論」¹³⁾を下している。こうしてディアスは、嘉納塾出身で実力もあり、当時横浜で柔道教師を務めていた緒方義雄と、彼の助手として渡辺孝徳とを海軍省の柔道指南役としてサルミエント号に乗船させた¹⁴⁾。緒方らは航海中も海軍士官に柔道を教えながら、1906年12月にアルゼンチンに来航した。緒方はその後、主として首都ブエノスアイレスに滞在しながら、海軍以外にも警察や、ヒムナシアクラブという地元のスポーツクラブに柔道を教授している¹⁵⁾。

(3) 講道館から見たアルゼンチンへの柔道普及の実態

アルゼンチン柔道界にとって、この緒方こそがアルゼンチンに柔道を伝えた先覚者である。しかし講道館において、1911年頃から1934年まで緒方の消息は不明とされており¹⁶⁾、アルゼンチンにおける柔道普及の実質上の嚆矢となる人物は、1929年にアルゼンチンに入学、コルドバ州を中心に活躍し、1935年に亜国柔道倶楽部を立ち上げた熊澤十郎となっている。なお、熊澤が1937年に『柔道』に掲載した「南北米柔道の今昔について」¹⁷⁾においても、緒方については一切触れられていない。普及の形態を鑑みる

と、緒方も熊澤も共に同じ講道館出身であるにも関わらず、緒方よりも後に来亜した熊澤が脚光を浴びるという事実は、国内と現地とでは、柔道の普及に対する認識に差があることを示唆すると同時に、1920年代以降に加速した柔道の海外普及に注目が集まることで、逆にその土台となったと思われる普及の第1陣が軽視される傾向があることを示していると考えられる。

2. 福岡庄太郎の足跡

(1) 渡米からアルゼンチン入国までの福岡庄太郎

1878年、佐賀県唐津市に鉄砲火薬販売問屋を営む福岡善助・ナカの長男として生まれた福岡は、唐津中学校（現・佐賀県立唐津東高等学校）を卒業している¹⁸⁾。1902年に妻子を残して単身貨物船に乗り込み、渡米した¹⁹⁾。そこで、講道館から派遣されていた柔道家で、異種格闘技興行に参戦しながら世界各地を回っていた前田光世に遭遇している。また、福岡が渡米した1902年という年は、講道館柔道家として最初に渡米した山下義韶の1903年より早く、同じく講道館柔道家として最初に興行試合を行ったとされる前田よりも早い。南米旅行中にパラグアイで福岡と出会った山岡光太郎はその著書の中で、「日本人にして北米でヤンキーを相手に、柔道で取組をやったのは、仰もや仰も此人が嚆矢ださうで、コンデコマ事^{マツ}前田五段などはズート其後渡米した」²⁰⁾と記している。実際は、福岡の渡米以前から複数の柔術家が新天地を求めてアメリカに渡っており²¹⁾、福岡が嚆矢というわけではないものの、普及活動を実践した人物として福岡はかなり初期に位置する人物であることは間違いない。また、興行試合の開催場所が全階層に開かれた場所²²⁾であったことを考

えれば、講道館による海外における武道の普及が生じる前に、福岡ら柔術家によって武道が根付く基盤が形成されていた、と考えられる。さらに、北米で前田と興行試合を行っていた福岡は、「その後ヨーロッパに渡りサーカスに入り、柔道を見世物に渡り歩いた」²³⁾とあり、ヨーロッパ各地で興行試合を重ねていたことが明らかである。やがて北米に戻った福岡は、1906年1月、欧州で知り合った柔道指南役の角田利太郎と共に中米を経てアルゼンチンに入国した。なお、アルゼンチン入国に際しては、「カシーノと契約して北米から来亜」²⁴⁾とある。カシーノ(casino)というスペイン語は賭博場という意味であるが、興行試合がもつ性格のひとつとして、競技者同士、または観客による賭博行為も含まれていた。



写真1 渡米当時の福岡。

出典：ライモンド・タケシ・フクオカ氏所蔵

(2)アルゼンチン入国後の福岡庄太郎

異種格闘技興行に参加するため、1906年1月にアルゼンチンに入国した福岡は、当時ほとんどの日本人移住者が暮らしていた首都ブエノスアイレスではなく、当時、港町として産業、工業の面で注目を集めていた新興都市であるサンタ・フェ州のロサリオ市に居を構え、柔術を指導した。先に紹介した緒方義雄が1906年12月にブエノスアイレスに到着したことを鑑みると、アルゼンチン国内で普及活動を行った嚆矢は福岡といえよう。また、少なくとも1910年の段階において、ロサリオに住んでいた日本人は福岡一人であった²⁵⁾。福岡は、1915年9月に同地を離れるまで、約10年間、ロサリオ市において様々な活動を行っている。以下に、その活動を活動場所ごとに分類したい。

①警察

福岡が警察官として採用されるまでの経緯は明らかではないが、ロサリオ市で行われた異種格闘技興行における福岡の活躍が警察に伝えられ、捕縛術、護身術としての柔術を警察官に指導するために採用された、とされている²⁶⁾。福岡の待遇は准尉、所属は騎馬警官であった²⁷⁾。また、路面電車の定期券を取得する際に、警察で柔術の先生であることを示す証明書が発行されており、この件に関して、1981年10月4日のエル・パイス新聞(El Pais)によると、警察の柔術の先生になることによって路面電車の定期券を取得することができた、と記されている²⁸⁾。

②警察学校

ロサリオ市には、ロサリオを含むサンタ・フ



写真2 騎馬警官姿の福岡。

出典：Jose Maria Pacher ed., 4, 10, 1981, *La foto que se negó a morir*, Rosario, El Rosario

エ州の警察官を養成する警察学校（Escuela de Cadetes de Policia de la Provincia de Santa Fe）があり、福岡はそこで柔術を指導していた。

③道場

警察官を職に持つ傍ら、福岡はロサリオ市内で柔術の道場とマッサージ屋を開業していた²⁹⁾。

④スポーツクラブ

福岡は、地元の名士で体操教師であったアロスピデガレイが1905年に創設したスポーツクラブである、スポルティーバ・ロサリーナ（La Sportiva Rosarina）に加入している³⁰⁾。スポルティーバ・ロサリーナは、アロスピデガレイが1908年にロサリオ市内に開設した同市初のスポ



写真3 1913年度の路面電車の定期を発行するための証明書。3行目に“Maestro de jiu-jitsu del Policia”と記載されている。

出典：ライモンド・タケシ・フクオカ氏所蔵

ーツクラブであった。受講者の愛国心の向上を図ることを最大の目的とした同クラブは、1910年の段階で10校の分校を持ち、1912年8月の段階で会員が500人という、ロサリオ市内で最大規模のスポーツクラブであり、ボクシング、レスリング、バスケットボール、野球、水泳、サイクリング、バイク競技、ラグビー、レガッタ、飛行機、ボーイスカウトといった様々な競技が行われていた。特に水泳用のプールは首都ブエノスアイレスに先駆けて作られたものだという。また、青年部や少年部の他に婦人部が設けられており、さらには近隣の都市でスポーツの公演活動を行うなど、多角的な取り組みを実践するクラブであった。

ここで福岡は、当時ただひとりの日本人として、柔術の他に、水泳の選手兼指導者、体操の指導者として活躍するいっぽう、フェンシングなどを学んでいる³¹⁾。また、スポルティーバ・ロサリーナの公演活動の際には、ボクシングやフェンシングに混じって、福岡も柔術を披露している。さらに、1913年9月15日付のカラス・イ・カレタス紙（Caras y Caretas）では、福岡



写真4 スポルティーバ・ロサリーナの集合写真。前列右から二人目、道着を着ている人物が福岡。また後列右から三人目、髭を蓄えた人物がアロスピデガレイ。更に、後列右から四人目がボクシング、その隣で腕組みをしている人物がレスリング、左端のサーベルを持った人物がフェンシングの指導者である。

出典：Joaquin, Pablo Orid ed., 11, 9, 1911, *En La Sportiva Rosarina -Interesante Fiesta*, Rosario: La Democrasia



写真5 フェンシングの受講者による集合写真。左から三人目が福岡。左から五人目がアロスピデガレイ。

出典：Fabio, Javier Gonzaloed., 6. 8. 1912, *Sociedad Sportiva Rosarina*, Rosario.: Caras y Caretas

を日本の剣術の達人と紹介しており³²⁾、また1911年9月11日付のラ・デモクラシア紙 (*La Democracia*) での集合写真なども合わせて鑑みると³³⁾、柔術を起点として活動を始めた福岡が、活動範囲の拡大とともに、柔術以外の技術も指導し、また逆に現地の技術を学ぶという、双方向の交流が行われていたことが推察できよう。

ところで、複数のスポーツ活動を行っていたスポルティーバ・ロサリーナであったが、その主催者であるアロスピデガレイは、護身術を重要視していた³⁴⁾。その際にアロスピデガレイが、護身術を単なる自衛の技術という狭義の意味ではなく、自己鍛錬を通じた身体能力の向上や、獲得した能力の善用、といった意味までも包含して捉えているのは³⁵⁾、大変興味深い点である。この点で、体操や水泳も、剣術や棒術、杖術やボクシングと共に護身術の範疇とされて

いる³⁶⁾。また、護身術を用いる目的として、自己の防衛を第一とし、徒に相手を傷付けることを戒めるだけでなく、可能な限り武力を用いずに相手を制することを推奨している³⁷⁾。このようなスポルティーバ・ロサリーナにおける護身術の定義の中で、柔術は相手の力を利用して相手の戦意を喪失させる技術としてだけでなく、身体能力の向上を図ることができる、として高く評価されている³⁸⁾。そして、「確かにほとんど知られていない、しかし護身術として大変有用であるこの日本のレスリングを習慣付けたひとりの指導員を祝わなければならない」と、福岡を評している³⁹⁾。

3. 福岡によるアルゼンチンでの武道普及を論じることの武道史的・歴史的意義

前項で明らかにしたとおり、福岡は1906年から1915年にかけて、ロサリオ市内の様々な場所で柔術の普及活動を行っている。それでは、福岡が行ったアルゼンチンにおける武道の普及を

表1 福岡の生涯年表および同時代史年表

| 福岡の生涯年表 | | 同時代史年表 | |
|---------|--|--------|--|
| 西暦 | 出来事 | 西暦 | 出来事 |
| 1878 | 6月19日、佐賀県唐津市で鉄砲・火薬問屋を営む福岡善助、ナカの長男として誕生 | 1868 | 明治元年 |
| 1895頃 | 唐津中学校（現・佐賀県立東高等学校）卒業 | 1873 | 剣術家である榊原鍵吉らによる撃剣興行が開催される |
| 1888 | 永田エキと結婚 | 1874 | 明治最初の不平士族の反乱である、佐賀の乱が勃発 |
| 1900 | エキとの間に、長男・輝男が誕生 | 1877 | 西南戦争で抜刀隊が活躍 |
| 1902 | 妻子を置いて貨物船に乗船し、単身渡米 ニューヨークを中心に異種格闘技興行を行う | 1882 | 嘉納治五郎が講道館柔道を創設 |
| 1903 | 渡欧し、パリなどで興行試合を重ねた後、再び渡米 | 1885 | 警視庁武術大会において、講道館勢が優秀な成績を修める |
| 1904 | 角田利太郎（柔術家）と出会う | 1888 | 最初の排日運動が、サンフランシスコの労働者の間で起きる |
| 1905 | ニューヨーク付近で前田光世と出会う | | ハーンやチェンバレンによる柔道の海外への紹介 |
| 1906 | 1月、興行のためにアルゼンチンの首都ブエノスアイレスに入国 | 1890頃 | 柔術家の内村外次郎が渡米 |
| | ロサリオ市で行われた興行がロサリオ市警察に評価され、当時日本人が未入植であったロサリオ市に居を構える | 1894 | 日清戦争 |
| | ロサリオ市警察・サンタフェ州警察学校で柔術を指導 ロサリオ市内で柔術道場、マッサージ業を開業 スボルティーバ・ロサリーナに加入し、柔術、剣術、水泳、体操を教えると共に、フェンシングなどを学ぶ | 1895 | 大日本武徳会設立 |
| 1915 | 冬に大病を患い、新天地を求めパラグアイの首都アスンシオンへ渡る | 1898 | 日亜修好条約 |
| 1916 | 5月、現地の新聞に広告を掲載 10月、レスラーのMax Gallantと興行試合を行い、観客の支持を受ける 12月、柔術の先生として福岡が新聞で紹介される アスンシオン市警察で柔術を指導する アスンシオン市内の中心部で柔術の道場、花屋を経営 複数の公立学校で教師や体育教師に就任 裁判所の陪審員として選出される 体操&フェンシングクラブのメンバーに選出され、柔術の他に水泳、ボクシング、レスリングを指導 | 1900 | 『武士道』（新渡戸稲造） |
| 1916 | ドイツ系移民のマリア・ファナ・ヒメネスと結婚 | 1903 | 山下義韶（講道館）が渡米、政府高官や高等教育機関に柔道を指南 |
| 1918 | 長女・ヨシが誕生 | 1904 | 前田光世・富田常次郎（共に講道館）が渡米 日露戦争 |
| 1920 | 長男・タケシが誕生 | 1905 | 前田光世が異種格闘技興行に参加 |
| 1922 | 次女・トシが誕生 | 1906 | 12月、緒方義雄（講道館）が、助手の渡辺孝徳を伴って来亜、ブエノス・アイレスを拠点に、警察、海軍士官学校で柔道を指南 |
| 1924 | 三女・チヨが誕生 | 1908 | 日米紳士協定 |
| 1925 | 四女・ハナが誕生 | 1912 | パラグアイに最初の日本人が個人で移住 |
| 1931 | 花屋以外の仕事を辞める | 1914 | 第一次世界大戦 |
| 1933 | パラグアイ最初の日本人移住地である、ラ・コルメナ移住地開設の視察に訪れた宮坂国人（ブラジル拓殖組合専務理事）を案内する | 1918 | 第一次世界大戦終結 柔道の海外進出が本格化 |
| | | 1922 | 前田、ブラジルのアマゾン河口の町ベレンに居を構える |
| | | 1924 | 排日移民法（米） |
| | | 1926 | 前田、トメヤス植民地創設事業に着手 |
| | | 1929 | 熊澤太郎（講道館）が来亜、コルドバ市を中心に柔道を教える |

| | | | |
|------|--|------|--|
| 1935 | 日本パラグアイ文化協会の発足に際し、理事を務める | 1934 | ブラジルで移民制限二分法が発令される |
| | | 1935 | 熊澤、亜国柔道倶楽部を創設 |
| | | 1936 | 日本・パラグアイ間で移住協定が結ばれ、ラ・コルメナ移住地へパラグアイ初の日本人集団移住が行われる |
| 1939 | パラグアイ国経済使節団の一員として帰国、皇紀2600年祭において海外発展功労者として松岡外務大臣により表彰される | 1939 | 第二次世界大戦 |
| 1947 | 10月16日、アスンシオンで死去（享年69歳） 福岡の死亡記事が、アスンシオン、ロサリオ両市の複数の新聞に掲載される。11月11日のエル・バイス紙は、「我々にスポーツを教え、広めてくれた福岡庄太郎が消えた」という見出しで、福岡の業績を高く評価する記事を掲載した。 | 1945 | 第二次世界大戦終結 |

扱うことの武道史的・歴史的な意義はどこにあるのか。結論からいえば、それは①非エリートによる武道の海外普及のルートを検証することによる、普及回路の複数性の明確化、②普及に際する普及する側と受容する側の双方向的関係の解明、を行うことができる点にある。そこで本章では、上記の点についていくつかの観点から詳細に論じたい。

(1) 武道による海外普及の回路の複数性

① 非エリートによる武道の海外普及のルート

福岡は後ろ盾をもたない市井の柔術家であり、従って武道を指導する場を事前に用意されていたわけではなかった⁴⁰⁾。けれども前章で明らかにしたとおり、興行試合によって名を上げた福岡は、警察や警察学校で柔術を教えると共に、柔術の指導場を市内に設け、さらには現地スポーツクラブで柔術と共に様々なスポーツを教えるまでに至った。こうした事例は、当該時期のアルゼンチンにおける武道普及の一端が、福岡によって担われていたことを示すものである。先行研究においては柔道以外の格闘技者や武術家が武道の海外普及について果たした役割については軽視されがちであり、肯定的な解釈が成されていないが、赴任先の高等教育機関や国の管轄機関での指導を目標とするエリー

ト達と比肩しうる成果を一介の柔術家である福岡が挙げたことは、エリートによる武道の海外普及を重要視する通説的な歴史像にその再検討を提起するものであろう。

② 武術家による武道の普及

これまでの研究において福岡のような非エリートの武術家の動向が着目されなかった理由として、概ね2つの要因を挙げることができる。

1つは、武術家たちのなかに山師まがいの者たちも少なからず存在しており、彼らがエリートによる武道の普及活動を阻害していたことにのみ注視していたため、武術家と山師とが等閑視される結果に陥っていたことである。この問題は福岡という事例を用いることによって、すでに克服されている。

2つめは、武術家による普及はあくまでも武術の普及であって武道の普及ではない、という論理が適用されることで、武術家の活動が武道の普及から除外されてきたことである。確かに本稿においても、近代文化としての武道と明治期以前の伝統文化としての武術とは切り離して捉えており、また決して同列にならべることのできないものである。しかしながらこうした認識のみによって、初期段階における武道の海外普及を問うことが必ずしも妥当であるとは言



写真6 スポルティーバ・ロサリーナによる隣町での公演活動後に行われた晩餐会。左列の前から五人目の鼻から上が見えている人物が福岡。同列の一番前がアロスピデガレイ。

出典：Fabio, Javier Gonzaloed., 15. 9. 1912, *En Arroyo Seco*, Rosario: Caras y Caretas

切れないのではないだろうか。以下に、世紀転換期の武道の海外普及に対して今日的視点で俯瞰することの妥当性から検証したい。

従来の研究において用いられる武術と武道という区分は、1895年の大日本武徳会の成立後に、講道館を中心に徐々に成されていったものである。そして、早くから理念形成が行われてきた柔道と、そうではない剣道や弓道とが武道という名目下に定着するのは、1910年以降のことと考えられる。また、1章の1節で述べたように、地方においては20世紀に入っても柔道と柔術が混在する様相を呈していた。このように、日本国内においてすら武道と武術の区別が十分でなかった世紀転換期において、海外でその差異を正しく認識できるとは極めて考えにくく⁴¹⁾、それどころか武術と武道も日本から伝来した新しい文化という点で同列にみなされてしまうのである。特に世紀転換期は、ジャポニズムや日露戦争その他の要因によって、日本文化が海外へと急激かつ大量に流入された時期であったことも、こうした認識が起りえた大きな

理由であろう。

さらに次節で詳細を述べるが、普及者側とは別に存在する受容者側の思惑や受容に至る背景が普及の際に大きな役割を果たしており、ときとして受容者側が普及される内容の役割を規定することさえ有り得たことを見逃してはならない。この際において受容者側が必要とする区分は、武道か武術かではなく、受容者側の要求に応え得るか否かなのである。武道の海外普及が本格化するのが第1次世界大戦以後のことであったことを踏まえても、世紀転換期における武道の海外普及においては、今日的な区分けによって武道と武術を切り離すことは妥当性を欠くといえるのである。

(2)普及者側と受容者側の双方向的関係

福岡による普及活動がアルゼンチンで大きな成果を取めた原因は、普及者側である福岡自身と受容者側であるアルゼンチンの双方に求めることができる。むしろ、普及者側から受容者側への一方向の普及では、社会とこれほどの結びつきを得ることは困難であっただろう。そこで以下では、双方の観点から福岡による普及行為の歴史的意義を考察したい。

①普及者側の現地社会への積極的接近

前章で述べた福岡の現地社会での経歴について順を追って簡単に整理すると、以下のようになる。

- a, 興行試合を通じたロサリオ市警察への接近
- b, 柔術が警察および警察学校で採用され、騎馬警官の地位を得る
- c, ロサリオ市内で柔術の指導場、マッサージ場を開設
- d, スポルティーバ・ロサリーナへ入会

e, 同スポーツクラブにおいて柔術, 体操, 水泳, 剣術を指導

f, 同スポーツクラブにおいてフェンシングなどを学ぶ

こうした経歴から明らかなことは, 部外者として現地社会に入り込んだ福岡が, 柔術を通じて警察官になることで社会的信用を得るとともに, 当時日本人のいなかったロサリオ市内で開業するにまで至るいっぽう, スポーツクラブで指導者側と学ぶ側の双方の立場に立つことによって, 現地社会と積極的な交わりを持ったことである。福岡がスポルティーバ・ロサリーナ内においてどれほどの待遇を受けていたかについては, スポルティーバ・ロサリーナ主催の晩餐会での写真からも窺い知ることができる。

福岡がこのように地域社会に密着した活動を行うことができた要因は, まさに非エリートの武術家による普及活動の特徴と言い換えることができる。その要点は以下の2つである。

第1に, 武道普及の大義名分を背負う必要がなかったことである。たとえば柔道の場合には, 普及に際する理念は嘉納および講道館によってつくられるものであり, 柔道の普及者にとって, 普及先で必要に応じて多少の修正が生じることはあっても, 理念そのものが大きく変更する可能性はほとんどない。しかしそのいっぽうで, 普及者が独自の理念を普及することも認められていない。そして, 普及者がエリートであればあるほど, 柔道の普及という使命と役割の重みは増大すると考えられる。こうした制約下では, 普及活動の舞台はおのずから自前の導場や支援者の援助による指導場に限定されがちとなる。その結果エリートは, 指導場以外の場所において他のスポーツに混じって柔道を教える積極的な必要性はなくなり, 柔道に興味のあ

る人間のみを普及の対象にすることができた。また, たとえスポーツクラブで柔道を教える際であっても, 柔道の理念を受容者側に合わせて変質させることはできないのである。この点において, 海外における普及理念を形成する思想母体が皆無とってよい柔術とは大きく異なる。

いっぽう, 非エリートの柔術家である福岡の場合は, 援助者によって確約された指導場がなかったがために, まずは現地の社会にいち早く溶け込んで一定の地位を確保し, 生活を安定させる必要があった。そのために, 最初から現地の社会と正面から向き合い, 現地社会に自分を適応させる必要があったのである。この点において, 非エリートによる普及活動は, いかにも現地社会との接点を高く保ちえるのかが根源的な命題として課せられているのである, といえよう。

第2に, 柔術のみならず複数の競技の指導によって, スポーツクラブの構成員との幅広い接点を持つことができた点である。そして, 柔術家である福岡が複数の競技を指導し得た理由のひとつを柔術の持つ武術的な特徴に求めることができよう。たとえば起倒流柔術や制剛流柔術, 関口流柔術といった著名な柔術諸派は, 柔術を中心としつつも, 剣術や馬術, 縄術, 泳法などの諸術を混交した総合的な武術を教えていた。また逆に, 剣術や槍術を中心に置きながら, 柔術や捕縛術, その他の術技も教える流派も多数存在していた。端的にいえば, 柔術や剣術, 馬術といった個々の術技はそれ自体で成立しながら, 同時に武術という大きな枠に内包されていた, といえるだろう⁴²⁾。

興味深いことは, 日本では武術として括られる福岡の指導競技が, アルゼンチンで身体鍛錬

ないし護身術として再統括されたことである。この点において、武道と武道以外の競技を同一の理念の下に置くことを、当該時期における武道の海外普及における通説で解釈することは困難である⁴³⁾。しかし、先に述べた柔術の普及理念の希薄さが、アルゼンチンのスポーツクラブの理念に日本の武術の理念が組み込まれることを可能にしたと考えられる。こうした受容側による意味付与に関しては、次項で明らかにしたい。

②アルゼンチンにおける柔術の受容

本章1節の2項で簡単に述べたとおり、ときとして受容者側によって普及の意味や役割が規定されることがある。そこで、アルゼンチン国内で武道が着目されるに至る背景や、ロサリオ市内の各施設における受容基盤を概観しつつ、受容者側の視点で武道の海外普及について論じていきたい。

そもそもアルゼンチン国内で武道が注目を浴びた理由が、日露戦争に対する有形無形の関わりによることは、1章2節で論じたとおりである。確かに、当時劣等国であった日本がロシアを破る姿が柔よく剛を制す柔道のイメージと重ねられることで、アメリカやイギリスといった当時の先進国で武道への関心が高まったことは先行研究でも明らかにされている。しかし、欧米列強においてだけでなく、アルゼンチンといういわば当時の日本からすれば辺境に位置する国においても日露戦争を通じた日本への関心が高まり、日本の強さを武道に求める傾向が認められるのである。特に当時のアルゼンチンは、周辺諸国と一触即発の状態にあり、国家的なレベルで国民の身体能力の向上を要請する向きがあったと考えられる。ここに、アルゼンチン国

内において武道を求める萌芽を認めることができよう。

いっぽう、直接的な受容者である警察や警察学校とスポルティーバ・ロサリーナとは、受容に至る異なる背景があったといえる。そこで以下に、施設による2つの受容基盤を分類したい。

a, 警察および警察学校

警察や警察学校では市民の生活安全の確保を図る目的から、より質の高い自衛術、逮捕術が求められていた。これは当然ながら福岡の来亜以前からの要求であり、従って柔術が容易に入り込みやすい状況下にあったと考えられる。つまり、警察や警察学校における受容の基盤は格闘技術の向上にあり、柔術の技術的な側面が重視されたといえよう。

b, スポルティーバ・ロサリーナ

回顧録をもとに同スポーツクラブにおける柔術の受容基盤を考えるうえで重要なことは、アロスピデガレイ自身が身体能力の向上およびその能力の善用に関して、確固たる理念や展望を確立していたことである。それはたとえば、柔術を「日本のレスリング」と称するいっぽうで、西洋のレスリングを護身術の範疇に含まなかったことから窺い知ることができる。つまり、格闘競技ならば全て受容の対象とされたわけではなく、あくまでもアロスピデガレイの理念に即したものが採用されていた、ということになる。軍人や警察官、消防士といった専門職だけではなく、女性や子供も含む一般市民までも視野に入れた場合に、筋力に頼る部分の多いレスリングは不相当であると判断し、柔術は適当なものとして採り入れているのである。

この点において、回顧録において、柔術の特徴は筋力ではなく器用さと敏捷性にある、というアロスピデガレイの評価は、すなわちそれが女性や子供でも行うことができる、という判断に繋がった、と考えられる。換言すれば、受容の是非の判断が普及者側の福岡ではなく、あくまでも主宰者であり受容者であるアロスピデガレイに委ねられていた、ということになる。

このように、警察や警察学校で求められる技術としての柔術、スポルティーバ・ロサリーナで認められるような理念を含む身体鍛錬としての柔術、そのどちらの要請にも福岡は応えることができた。特に、理念の確立していたスポルティーバ・ロサリーナで柔術の普及を行うことができたのは、本項1節で述べたように、柔術そのものが持つ普及理念が希薄なため、受容者側の理念下に置かれる際に抵抗が生じなかったからである。

つまり、福岡による普及活動が、双方向の関係のなかで社会との緊密かつ幅広い接点をもちえたのは、普及者側である福岡による社会への接近とともに、受容者側が福岡の持つ柔術に、柔道では成しえない意味を付加することによって、現地社会の需要に沿うかたちに変容されたことが大きな要因といえるのではないだろうか。そしてこのような変容を容認するフレキシビリティが、非エリートによる武道の海外普及の大きな特徴と考えられるのである。

おわりに

本研究では、武道の海外普及を問う際に日本（普及者）から海外（受容者）へ、という文化伝播の方向性に着眼する従前の研究の手法とは異

なり、受容者側の現地史料を最大限に活用することで、世紀転換期における武道の海外普及の実像に迫った。そして、この研究を通じて武道の海外普及に関する歴史的な意味が厚みを増したように思われる。

今後の課題としては、より精密な受容の様態を把握するために、スポルティーバ・ロサリーナでアロスピデガレイが護身術や身体鍛錬に着目するに至った経緯について、アルゼンチン国内の当時の風潮や世紀転換期に流行した、いわゆる帝国主義的な身体論との関わり合いにおいて調査する必要がある。また福岡は、後にアルゼンチンからパラグアイに渡り、そこでも様々な活動を行っていることから、パラグアイにおける福岡の動向に関しても早急に明らかにしたい。なぜなら、アルゼンチンにおける福岡の活躍は、パラグアイにおける活動のための前提ないし準備期間にあたると思われるからである。さらに、福岡個人に終始することなく、研究対象を広げ、同時代に福岡と同様の活動を行った他の格闘技者の調査を行うことで、武道の海外普及における初期段階の実態と全体を明らかにしていく必要があるだろう。

註

- 1) 武道の普及に関して、丸山三造の『大日本柔道史』第一書房、1939）や『柔道世界をゆく』日本柔道研究会、1950）、〔老松信一『改訂新版柔道百年』時事通信社、1976〕など、講道館関係者らによる研究成果があり、また近年では井上俊が、『武道の誕生』吉川弘文館、2004〕において近代文化としての武道について論じている。なお、これらの先行研究においては、嘉納の言説や講道館の機関紙が主要な参考文献とされている。
- 2) 国内においては一切の他流試合を禁じるいっぽう、国外においては、他流試合そのものを禁

- じていたわけではない。しかし、それはあくまでも技術の研究の為であり、「然し研究を目的とせず営利的目的で試合することは禁ずる所」〔丸山, 1939, p.135〕であった。つまり講道館は、ときには賭博行為を伴う興行試合に関しては禁止するものとしていた。なお実際には、世紀転換期において講道館の柔道家でありながら興行試合を行った者たちも前田光世を筆頭として複数名確認されるが、その点に関して講道館は許可ではなく黙認という対応を示しており、従って講道館発行の文献には、興行試合の様子は詳細にされていない。この件に関しては、〔丸山, 1939, p.135〕および〔『柔道』五月号, 1916, p.86〕を参照のこと。
- 3) さらに、前田の場合は、以下の理由から、本文で紹介した山下のようなエリートとは異なる経緯を辿った、と考えられる。それは、講道館から派遣されているものの、当初の普及先であったアメリカの高等教育機関での普及に失敗し、生活に窮した結果、否応無しに行わざるを得なかった、異種格闘技興行を通じて得た交流であること、である。これは、エリートに対する普及の挫折から副次的に生まれた普及の回路、と考えられる。
- 4) 嘉納の柔術理解を示す例としては、他にも「昔は柔術は幾流にもわかれていて、或る流儀は仕方も高尚であり、したがって、身分ある人も、これを学んだのであるが、また、足軽、その他社会の下層におる人々の間に行われた柔術もあって、それらは多く、逆を取るとか、喉をしめるとか、捕手捕縛に用いるような技術を主として教えたのである。それ故、この類の柔術は、武芸の中でも、幾分か、重んぜられぬおもむきがあったのである。しかるに、社会の多数の人には、高尚な柔術はあまり知られずに、捕手風の柔術が、多く知られておったような関係から、柔術は、剣術・槍術等に比し、武術としてはやや下った位にあるもののような感を抱くものが多かった」〔大滝編, 1972, p.95〕と述懐しているくだりがある。
- 5) 1902年に東京から佐賀へ帰郷した三段の古賀小一が1906年に報国館を開設した。
- 6) 相良, 1991
- 7) 井上, 2004, pp.118-120
- 8) 柔道が投げ技を重視ようになる過程については〔嘉納「講道館柔道の発達史」, 『新日本史』, 1925, 『嘉納治五郎著作集第2巻 柔道編』, 1983, p.146〕に詳しい。このような、柔道における投技偏重の趣きは、海外へ派遣された多くの柔道指導者にも受け継がれており、例えば、1920年に渡米し、シアトルを中心として柔道普及に尽力した桑島省三が、アメリカ人に柔道を指導する苦勞を綴った文章にも、いかにしてアメリカ人に投技の妙味を教えるかについて述べた一節〔丸山, 1939, pp.353-355〕がある。
- 9) 嘉納『嘉納治五郎著作集第2巻 柔道編』, 1983, p.274
- 10) 同上, 1983, p.146, p.274
- 11) 柔道における打撃による攻撃の名称。
- 12) 例えば註2で紹介した山下に関して、セオドア・ローズヴェルト大統領は、最初は山下と共に日本の日露戦争の勝利を喜んだが、後に日本を警戒する旨を報告しており、アメリカの排日運動にも少なからず影響を与えている。また、イギリスでは、日露戦争を境に柔術のメディアへの露出が増加し、柔術の認知と普及に大きな役割を果たすと共に、東洋の小国が大国ロシアを打ち破った姿が、体格の劣る者でも勝負することのできる柔術のイメージを通して語られることにも繋がった。いっぽう、海外で活動する日本人格闘技者たちも、日露戦争の勝利による立場の変化を敏感に感じ取っており、先述した前田光世は友人にその旨を書いた手紙を送っている。詳細は〔井上, 2004, pp.75-76〕を参照のこと。
- 13) 北山「日本・アルゼンチンのスポーツ交流」『日本アルゼンチン交流史』, 1998, p.311
- 14) Jose, Maria Pacher ed., 4, 10, 1981, *La foto que se nego a morir*, Rosario, El Rosario. において “En la primera de'cada de nuestro siglo, ma'sprecisamente el 29 de noviembre de 1906, cerrando el se'ptimo viaje de instruccio'n, fondeaba la gloriosa Fragata Presidente Sarmiento. Sobre cubierta Yoshio Ogata y Kotoku Watanabe,

- Profesor e instructor de “jiu-jitsu”, respectivamente” とある。また、〔半田「柔道思ひ出話（七）」『柔道』十二月号, 1935, 『柔道 復刻版3巻』, 1986, pp.32-33〕もあわせて参照のこと。
- 15) 賀集, 1981, pp.181-182
- 16) 半田「柔道思ひ出話（七）」『柔道』十二月号, 1934, 『柔道 復刻版3巻』, 1986, pp.32-33
- 17) 熊澤「南北米柔道の今昔について」, 『柔道』四月号, 1937, 『柔道 復刻版5巻』, 1986, pp.28-29
- 18) 唐津中学校の前身は、唐津藩の藩校である志道館であった。志道館は明治5年9月に閉館したが、漢学部、医学部、洋学部は存続し、洋式教練も取り入れている。また、学問所と併設して剣術や柔術の稽古場もあった。福岡が習った柔術の流派に関しては現時点では定かでないが、志道館を継承する形で唐津中学校が設立された経緯を踏まえると、中学校時代にそこで行われていた柔術諸派のいずれかを学んだ可能性が高いと考えられる。なお、志道館に関する詳細は、『唐津市史 復刻版』〔唐津市史編纂委員会, 1991〕を参照のこと。
- 19) この点に関しては、2004年9月22日、福岡庄太郎の甥に当たる福岡茂氏と、茂氏のご子息である修氏からの聞き取りによる。但し、文献によるものではない。
- 20) 福岡と前田が出会った時期は明らかではないが、福岡が渡米後しばらくの間ニューヨークを拠点に異種格闘技興行を行っていたこと〔山岡, 『南米と中米の日本人』, 南米研究会, 1922, p.107〕, 前田光世を前田榮世と呼んでいる（「福岡さんから私が直接聞いた話によると、…（中略）…、前田榮世氏（五段）と柔道をやっていた」〔傍点は引用者注〕〔パラグアイ日本人移住資料館創設事務局『エピソード パラグアイを歩いた日本人——石井道輝遺稿集』, パラグアイ日本人会連合会, 1993, p.9〕が、〔神山典士『ライオンの夢 - コンデ・コマ = 前田光世伝』, 小学館, 1997〕によれば前田は、1905年7月に名前を「榮世」から「光世」に改名していること、1905年の時点で前田はニューヨークの日本人村を拠点に興行をしていたことから考えて（同上）、1905年7月より以前にニューヨーク付近で知り合ったと推測される。
- 21) 例えば柔術家の内村外次郎などは、1890年初頭には渡米していた。
- 22) 〔煙波生「空拳でピストルの悪漢と闘った前田四段」『冒険世界』第四巻第四号, 1911, p.108〕において、「此街にも大きな闘牛戯場が有る。此処で最初に試合をやった。」「今度は同地第一の劇場で前田君は柔道の講演をした、劇場は闘牛戯場よりは小さいが、入場者の種類が異ふ劇場だと上流者や婦人連も沢山に来る、有ゆる階級を網羅する事が出来る。」とあるように、様々な場所を舞台にすることで、幅広い階層を対象に武道の普及を行うことができた。
- 23) 〔パラグアイ日本人移住資料館創設事務局『エピソード パラグアイを歩いた日本人——石井道輝遺稿集』, パラグアイ日本人会連合会, 1993, p.9〕また、福岡庄太郎の長男であるライモンド・タケシ・フクオカ氏から、福岡は欧米23カ国を回っており、パリでは画家のモデルなどもしていた、という証言を得た。但し、史料はない。
- 25) アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編, 2002, p.52
- 26) 警察学校 (Escuela de Cadetes de Policía de la Provincia de Santa Fe) で30年以上護身術の指導を行う傍ら、福岡に関する史料を収集されているウーゴ氏 (Hugo Gomez Fernandez) による聞き取り調査による。また、Jose, Maria Pacher ed., 4, 10, 1981, *La foto que se negó a morir*, Rosario: El Rosario. には “Hemos constatado que hasta el año 1913 proseguía el subteniente Fukuoka con sus tareas de maestro de “jiu-jitsu” en el Departamento de Policía de Rosario” とあり、福岡が1913年まで警察で柔術を指導していたことが窺える。
- 27) “El subteniente don Shotaro Fukuoka” と Jose, Maria Pacher ed., 4, 10, 1981, *La foto que se negó a morir*, Rosario: El Rosario. にある。
- 28) “En su prontuario, que lleva el No 4015, obra constancia de que el 29 de octubre de 1913 se le expidió una certificación “a fin de obtener un pase de tranvía, por ser maestro de jiu-jitsu, del

- Departamento de Policía.”と Jose, Maria Pachered., 4, 10, 1981, *La foto que se negó a morir*, Rosario: El Rosario. にある。
- 29) Jose, Maria Pachere ed., 4, 10, 1981, *La foto que se negó a morir*, Rosario: El Rosario. において, “Hemos constatado que hasta el año 1913 proseguía el subteniente Fukuoka con sus tareas de maestro de “jiu-jitsu” en el Departamento de Policía de Rosario. En su prontuario, que lleva el N° 4015, obra constancia de que el 29 de octubre de 1913 se le expidió’ una certificacio’n “a fin de obtener un pase de tranvía’ por ser maestro de jiu-jitsu, del Departamento de Policía. Su profesio’n’: profesor de jiu-jitsu y masajista. とある。
- 30) Juan b. Arrospeigaray ed, 1943, *LA GIMNASIA ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*, Rosario
- 31) アロスピデガレイの回顧録における水泳, 体操の競技者, 指導者欄に福岡の名前が記載されている。また, Fabio, Javier Gonzaloed., 6. 8. 1912, *Sociedad Sportiva Rosarina*, Rosario.; Caras y Caretas には, フェンシング着を着用した福岡が, 練習後にアロスピデガレイ他の選手と撮影した記念写真が掲載されている。
- 32) Fabio, Javier Gonzaloed., 15. 9. 1912, *En Arroyo Seco*, Rosario: Caras y Caretas において, “Gran novedad: Keen Jitsu. Esgrima japonesa por los profesores japoneses S.Fukuoka y E.Takimoto.”とある。なお, 文中にあるE.Takimotoなる人物については, 現在調査中である。
- 33) Joaquin, Pablo Orid ed., 11, 9, 1911, *En La Sportiva Rosarina —Interesante Fiesta*, Rosario: La Democrasia において, 柔術着を着用した福岡と共に, レスラーやボクサー, フェンシング選手などによる集合写真が掲載されている。
- 34) Juan b. Arrospeigaray ed, 1943, *LA GIMNASIA AL ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*, Rosario はスポーツイーバ・ロサリーナの主催者であるアロスピデガレイによる回顧録であるが, 副題として「スポーツイーバ・ロサリーナにおける格闘 路上や地面での護身術」(Los Batallones de la Sportiva Rosarina Defensa personal, en la calle en lapedana, en el terreno) と記されている。また, この回顧録は全三章で構成されているが, 第三章は全て護身術に関する内容であり, 護身術を行うことの重要性が繰り返し述べられている。
- 35) 身体能力の向上に関しては, Juan b. Arrospeigaray ed, 1943, *LA GIMNASIA AL ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*, Rosario に “Se puede ejercitarse, tocado los puntos más sensibles del cuerpo: la boca del estómago, (plexo solar) la base del cráneo, la carótida, debajo, de la nariz, detrás del hueco de las orejas y la nuez.”とあり, また能力の善用に関しては, 特別な訓練と習得 (Ejercicios y Ejercitacion especial) の項目において, 護身術を用いて自己を守るのはもちろん, 訓練を重ねることで他人の救助をすることができる, とあり, 警備者にとっての護身術 (defensa personal para agents) では, 護身術は己と相手の身を安全に確保するための手段であり, 徒に相手を傷付ける目的で使ってはならない, としている。
- 36) 註21で取り上げた, 回顧録の第三章にある護身術の項目において, 水泳, 体操が説明されている。それによると, 水泳や体操の訓練で得た技術だけではなく, 作り上げた強靱な肉体そのものが, 身を守る手段として通用する, とされている。
- 37) 註22で取り上げた, 特別な訓練と習得 (Ejercicios y Ejercitacion especial) の補足として, 可能であれば, 武力ではなく説得によって相手を制するのが望ましい, と記されている。
- 38) Juan b. Arrospeigaray ed, 1943, *LA GIMNASIA AL ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*, Rosario に “No se necesita gran vigor fisico, puesto que se pone en juego la destreza contra la fuerza y muchas veces, en la toma de cuello o torciones de brazos se sprovecha la fuerza del adversario, para que los golpes den un resultado positivo.”とある。
- 39) Juan b. Arrospeigaray ed, 1943, *LA GIMNASIA AL ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*,

Rosario に “Esta enseñanza debe impartirla un instructor avezado en esta lucha japonesa, poco conocida por cierto, pero de mucha utilidad como defensa personal” とある。

- 40) この点に関して、先行研究で武道の海外普及の初期段階に位置する人物として頻りに抽出される、註2で紹介した山下義韶とは好対照を成している。
- 41) 付言すれば、武道理念が明らかでない当該時期においては、たとえ講道館から正式に派遣された指導者であっても、武道としての柔道を普及していたか、という疑問が残る。また例えば、不遷流の柔術家として1905年にイギリスへ渡り、後に柔道へと転向し武道の普及に努めた谷幸雄の場合、同地で柔術家として活躍した期間を、柔術は武術である、という理由で武道の普及から切り離すことができるのか、という問題もあるだろう。
- 42) 逆に武道においては、たとえば講道館柔道が講道館剣道を併設するということはない。武道という括りのなかで、柔道や剣道、その他は密接に関連し合いながらも、適切な距離を保ちながら独立した存在となっている。この点において、講道館という名前は、武術における流派を意味するものではなく、講道館がすなわち柔道を指している、といえよう。
- 43) 外来スポーツと伝統的な武道との対立が顕著であり、それぞれの競技が理念の形成に躍起になっていたこの時期において、たとえば柔道と水泳とボクシングとを共通の理念のもとで指導することはほぼ不可能であったと考えられる。

史料ならびに引用参考文献

史料（新聞・回顧録・同時代文献）

- Fabio, Javier Gonzalo ed., 15. 9. 1912, *En Arroyo Seco*, Rosario: Caras y Caretas
- Fabio, Javier Gonzalo ed., 6, 8, 1914, *Sciedad Sportiva Rosariana*, Rosario: Caras y Caretas.
- Joaquín, Pablo Orid ed., 11, 9, 1911, *EN LA SPORTIVA ROSARIANA* Interesante fiesta, Rosario: La Democrasia.
- Jose, Maria Pacher ed., 4, 10, 1981, *La foto que se*

negó a morir, Rosario, El Rosario

Juan b. Arrospidegaray ed, 1943, *LA GIMNASIA ALCANCE DE TODOS Y PARA TODOS*, Rosario

Roque, Antonio Torres ed., 9, 11, 1953, *Realizara'n mañana el Festival Deportivo en el E. Municipal*, Rosario:, LaDemocracia.

Roque, Antonio Torres ed., 25, 11, 1953, *FELICITAN PROFESOR ROACH*, Rosario: La Democrasia.

Roque, Antonio Torres ed., 25, 11, 1953, *La labor de la escuela de educacon fisica*, Rosario: La Democrasia.

講道館文化會編『柔道 復刻版 1巻1號（1930）- 9巻6號（1938）』, 本の友社, 1986

早稲田大学図書館編『冒険世界 マイクロフィッシュ版 第一巻 第一号（1908年）- 第12巻 第12号（1919年）.』, 雄松堂出版, 2002

造士會『國士 復刻版 1號（1898）-63號（1903）』, 講道館書誌編纂會, 1984

記念誌

Centro Nikkei Paraguay 6ta Convencion Panamericana Nikkei ed., 1992, *Nikkei presente y fuerto*, Asuncion: Centro Nikkei Paraguay.

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編『アルゼンチン日本人移民史第一巻——戦前編』, 社団法人在亜日系団体連合会, 2002

賀集九平『アルゼンチン同胞五十年史』, 株式会社誠文堂, 1956

賀集九平『アルゼンチン同胞八十年史』, 六興出版, 1981

伊藤一男『続・北米百年桜 復刻版（1973）』, PMC出版, 1984

日本人アルゼンチン移住史編纂委員会編『日本人アルゼンチン移住史』, 日本人アルゼンチン移住史編纂委員会, 1971

日本アルゼンチン交流史編集委員会編『はるかな友と100年／日本アルゼンチン交流史』, 日本アルゼンチン修好100周年記念事業組織委員会, 1998

パラグアイ日本人会連合会編『未来への挑戦』, パラグアイ日本人会連合会, 1997

パラグアイ日本人会連合会編『パラグアイ日本人移

- 住五十年史—栄光への礎—, パラグアイ日本人
会連合会, 1987
- パラグアイ日本人移住資料館創設事務局『エピソード パラグアイを歩いた日本人——石井道輝遺稿集』, パラグアイ日本人会連合会, 1993
- 引用参考文献**
- 井上俊『武道の誕生』, 吉川弘文館, 2004
- 石岡久夫・岡田一男・加藤寛『日本の古武術』, 新人物往来社, 1980
- 神山典士『ライオンの夢—コンデ・コマ=前田光世伝』, 小学館, 1997
- 唐津市史編纂委員会『唐津市史 復刻版』, 唐津市, 1991
- 丸山三造『大日本柔道史』, 第一書房, 1939
- 丸山三造『柔道世界をゆく』, 日本柔道研究会, 1950
- 老松信一『改訂新版 柔道百年』時事通信社, 1976
- 岡田桂「十九世紀末—二十世紀初頭のイギリスにおける柔術ブーム 社会ダーウィニズム, 身体文化としての隆盛と帝國的な身体」『スポーツ人類学研究 第6号』, 日本スポーツ人類学会, 2004
- 大塚真琴「パナマ日本人移住史」『移住研究 No.22』, 国際協力事業団, 1985
- 大塚真琴「福岡庄太郎の生涯」『クロスロード』, 国際協力事業団, 1983
- 山岡光太郎『南米と中米の日本人』, 南米研究会, 1922

Review about Overseas Mission of Budo
— Mission of jujitsu in Argentina by Shotaro Fukuoka —

YABU Kotaro *

Abstract: At the turn of the century from the 19th to 20th Century, overseas missions of Budo (Japanese martial arts) practitioners were commenced. In those days, Judo experts from Kodokan performed brilliantly in foreign countries and the common historical impression of the overseas spread of Budo owed much to anecdotes of their missions. In the meantime, other martial artists who went abroad around the same time were considered less significant and the situation of recipients has not yet been investigated sufficiently. In this study, we carried out in-depth investigation of the performance in Rosario, Argentina of a mission by Shotaro Fukuoka, a street-level Jujitsu expert, using local documents of the time to review his mission activities with the viewpoint from recipients. Our results suggested the following hypotheses: [1] Budo was additionally expanded into foreign countries by non-elites such as Fukuoka. [2] Fukuoka's mission activities were enhanced by intimate contact with recipients' society. [3] The recipients considered Fukuoka's jujitsu different from Judo and utilized it in various situations.

Keywords: Budo (martial art), Jujitsu, Argentina, turn of the century, spread and popularization

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University